

さらに、「昨シーズン、ゴールドグラブ賞のイェリッチ外野手は、子どものころ、イチローのプレー、特に『背面キャッチ』にずっと憧れていた。シーズン中盤まで、ナ・リーグ打率首位のゴードン二塁手は、イチローを『師匠』と慕っている。本塁打と打点の両部門でトップを走っていたスタントン外野手は、イチローが王貞治の得点記録を日米通算で更新した試合において最敬礼し、その偉業を称えた。近い将来、日米の野球殿堂入り間違いのないイチローから、マーリンズの若い選手は、毎日、野球に関するいろいろなことを学んでいる。」という記事を読みますと、本当に嬉しく、誇らしい気分になります。

イチロー選手が、野球というスポーツを通して、入念に準備することの意味や努力を継続することの大切さを若いメジャーリーガーに伝え、日本人の代表として米国でも尊敬されていると思えるからです。

平成18年、「世界の日本人ジョーク集」(早坂隆著・中公新書)という新書本が、短期間に発行部数を一気に伸ばしました。その理由や背景は、著者自身の、「地球上を一つの共同体とみなす考え方が急激に進展していく大きなうねりの中で、日本人は、『自分たちは世界からどう見

られているのか」という問いかけを、これまで以上に強く抱くようになった。これは、『日本人とはどういう民族なのか』という自己認識に関する輪郭が、あやふやになっていく一つの証左かもしれない。」という分析にある、と思います。

この本の目次をめくるだけで、世界の人々が日本や日本人をどう見ているのか、よく分かるような気がします。

目次には、次のような活字が躍っていました。

「最先端技術の国」「模倣と創造」「裕福な国」「巨大な官僚機構」「真面目・勤勉」「会社人間」「集団行動」「時間正確」「主張が弱い」「笑わない」「英語が下手」「遠い神秘の国」「空手」「忍術」「マンガ」「アニメ」……。

「世界の日本人ジョーク集」には、笑いと風刺に富んだジョークがたくさん載っていました。紙面の都合で、二つのジョークをご紹介します。

ある豪華客船が航海の最中に沈み出した。船長は、乗客に海に飛び込み、船から脱出するように指示しなければならなかった。

各国の国民性を熟知していた船長は、それぞれの外国人乗客にこう言った。

イギリス人には、「飛び込めば、あなたは紳士ですよ。」

イタリア人には、「飛び込むと、女性にもてますよ。」

アメリカ人には、「飛び込めば、あなたは英雄ですよ。」

ドイツ人には、「飛び込むのが、この船の規則となっています。」

フランス人には、「飛び込まないでください。」

日本人には、「みんな、飛び込んでます。」



立科中学校生徒作品

国際的な学会で遅刻してしまったために、発表の持ち時間が半分になってしまった場合、各国の人々はどうするか? アメリカ人……内容を薄めて、時間内に収める。

イギリス人……普段通りのペースでしゃべり、途中で止める。

フランス人……普段通りのペースでしゃべり、次の発言者の時間に食い込んで止めない。

ドイツ人……普段の二倍のペースでしゃべる。

イタリア人……普段の雑談をカットすれば、時間内に収まる。

日本人……遅刻はありえない。

世界の人々から、どう評価されようが、どう批判されようが、また、どう揶揄されようが、日本には、世界に誇る文化と伝統、そして、「直き心」(勤勉・誠実・素直・真面目・謙虚など)がある、と信じています。

しかしながら、昨今、あつてはならない犯罪や嘆かわしい事件、痛ましい事故が頻発しているのも事実です。絶対に忘れないと心に刻んだショッキングな出来事が相次いで起こる出来事に次々に書きされ、めまぐるしい速度で風化していき、ご時世です。

日本の子どもたちが健やかに成長する国であるために、日本の大人が「直き心」を失わず、日本が、「今日の続きとしての明日を、明日の続きとしての明後日」を安心して待つことができる国であり続けてほしい、と願っています。

それが、最も望ましい教育環境と思われるからです。